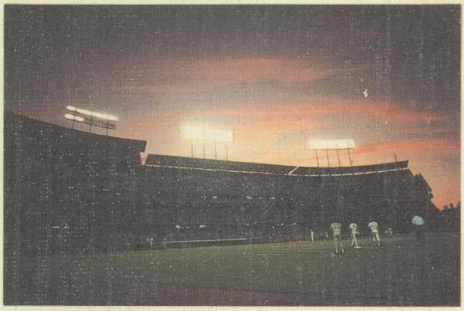
今はなき友へ

ベスト・コラム

レッド・スミス　東理夫訳



SERIES THE 9 SPORTS NONFICTION

片岡義男・小林信也編集

Excerpts from "TO ABSENT FRIENDS" by Red Smith.

東京書籍

今はなき友へ

ベスト・コラム

レッド・スミス　東理夫訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

Red Smith（レッド・スミス）
1905年9月25日，ウィスコンシン州グリーン・ベイで生まれた。1927年ノートルダム大学を卒業し，〈ミルウォーキー・センチネル〉紙の報道記者として活動を開始。〈セントルイス・ローン・スター〉，〈フィラデルフィア・レコード〉紙の編集，整理部記者をやつぎばやに経験したあと，1945年，〈ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン〉紙のスポーツ・コラムニストに就任した。ほどなく〈トリビューン〉紙が廃刊すると，レッドは〈ニューヨーク・タイムズ〉紙の専属スポーツ・コラムニストになり，1982年1月に亡くなるまで同紙に勤務した。長年の活躍によって得た賞のなかには，彼の母校ノートルダム大学からの名誉ＬＬＤ，ジョージ・ポーク・アワードなどがあり，そして1975年には，遅きに失したほどであったが，ピューリッツァー賞を受賞した。

シリーズ・ザ・スポーツノンフィクション　9
今はなき友へ
1990年11月5日第一刷発行
著者 レッド・スミス
訳者 東理夫
発行者 小高民雄
発行所 東京書籍株式会社
東京都台東区台東1-5-18
942-4111（営業）942-4173（編集）
印刷製本 図書印刷株式会社
ISBN 4-487-76087-9 C0398 NDC934

序

デイヴ・アンダーソン

もう何年も前、レッド・スミスは、彼の長年の友人にしてゴルフの達人、フレッド・コーコランの告別式で、追悼の辞を読んだことがあった。ミサが終ると、彼は祭壇へ歩みより、参列者の方を向きなおった。

「死ぬということは、そんなに難しいことではありません」そう彼は始めた。「我々は皆、なんとか死におおせるでしょう。でも、難題なのは、生きていくことのほうです」。

この言葉をレッド・スミスの墓碑銘としよう。そして、ウォッカ・アンド・トニックを墓にかけてやろう。でも、ライムはいらない。

「果物は入れないでくれ」彼ならそう言ったことだろう。「ウォッカとトニック・ウォーターと氷だけでいいんだ」。

一九七六年、レッド・スミスがピューリッツァー賞を受けたとき、〈ニューヨーク・タイムズ〉のエグゼクティヴ・ディレクターだったA・M・ローゼンタールのオフィスで彼を囲んで、お祝いのシャンペン・パーティを開いた。

「私はシャンペンなど飲まなかったよ」後に彼は言った。「私が手にしたのは、ウォッカ・アンド・トニックのグラスさ」。

言うまでもなく、彼のピューリッツァー賞受賞は、四半世紀ばかり遅すぎた。スポーツ・ライティングの地位を高めたのは、ほかのどんなスポーツ・ライターよりも、まずレッド・スミスである。彼は、それまでの偉大なスポーツ・ライターのように、スポーツ欄を捨ててほかの分野に走ったりはしなかった。

レッド・スミスほどの人がその一生をスポーツ・ライターとして過ごしたのだから、どんな人間も、スポーツ・ライターであることに不満など持つべきではない。率直に言って、彼は最高のスポーツ・ライターだった。真の〝ライター〟だった。

スポーツについて書くことを生業としている人は多いが、彼ほど言葉の隅々にまで神経を行きわたらせ、巧みにフレーズを操り、軽妙で洒脱な文章を書いたライターはいない。そしてたぶん、彼ほど書くことを楽しんだライターもいないだろう。レッド・スミスは、自分でもよく言っていたように、一生〝生粋の新聞人〟でいたいと思っていた。

「私は俳優になりたいと思ったこともないし、保険の勧誘をやりたいと思ったことも、トラックを運転したいと思ったこともない」と彼は言ったことがある。「私は、今私のやっていることをやりたいと思ってきただけだ」。

〈ニューヨーク・タイムズ〉の、そしてその前には〈ヘラルド・トリビューン〉のスポーツ・コラムニストとして、ニューヨークで過ごした三十七年間、レッド・スミスのコラムは読者を楽しませ、後輩を育ててきた。今日活躍しているスポーツ・ライターのほとんど

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は、彼のコラムを読んで育ったはずだ。レッド・スミスは彼らの憧れであり、インスピレーションの源だった。そしてまた、彼らの友人でもあった。若いスポーツ・ライターたちはレッド・スミスのまわりに群がるようにして集まり、彼の話に耳を傾け、ともに酒をくみかわし、そうすることで少しでも多くのことを学ぼうとした。その間じゅう、レッド・スミスはウォッカ・アンド・トニックを片手に、若いライターたちを楽しませていた。いや、教育していたと言ったほうがいいだろう。彼は七十六歳でこの世を去ったが、彼の遺してくれた物語は決して消え去ることがない。何年たとうが、彼の物語は繰り返し、私たちの脳裏に甦ってくるにちがいない。

レッド・スミスの記憶力はコンピューター以上だった。だが、決してそのことを記事の上でひけらかそうとはしなかった。

「記憶力なんて、身につけようとしてつくもんじゃない。生まれつきのものだ。若かった頃、私は、読んで楽しいと思った本だったら、ほとんど一度で覚えてしまったもんだよ。二度読めば絶対だったね。『ルバイヤート』なんて、百一節全部覚えてたぐらいさ」。

あれほどまで仕事ができたのは、その記憶力のおかげだと言ってもいいだろう。選手の名前を言っただけで、それがどんな選手であれ、次から次へと逸話が出てきた。

だがもっとも特筆されるべきなのは、記憶力より、彼の清廉潔白さだった。一九八〇年初め、レッド・スミスはアフガニスタンへのソビエト侵攻を〝残虐行為〟だと見なし、スポーツ・コラムニストの先頭を切って、モスクワ・オリンピックのボイコットを呼びかけた。「ただ私は、常識的な判断をしただけさ」と後に彼は言った。「隣の国に対して、あから

さまな暴力行為を働いているようなやつらの土地に行って、どうやってゲームができるっていうんだい？　ロシア人たちのゲームには、どんな形であれかかわるべきじゃないと思ったんだよ」。

カーター大統領がボイコットについて議論しはじめたのは、彼のコラムが掲載されてからあとのことだったが、そのことを覚えている人はあまりいない。

晩年のレッド・スミスのコラムは、コミッショナーのボウイ・クーンとヤンキースのオーナーのジョージ・スタインブレナー三世を、好んで槍玉にあげていた。そのふたりのどちらかがニュースねたになるような言動をしたときには、必ずと言っていいほど、コラムに取りあげられた。

一九八一年、選手たちのストライキが起きたときも、彼は、シーズンが中断したのは「ボウイのナイフ」のせいだと書いた。

ヤンキースのオーナーをくさすときも、「ジョージ三世」と、まるで王様を呼ぶようにして書いたものだ。

だが彼の批判はいつも、相手の仕事ぶりに対してのものであり、個人的なことには絶対に触れようとしなかった。批判された人々はそんな彼のやりかたを理解し、そしてその批判を受け入れたのである。レッド・スミスも「ハロー」と声をかけ、彼らもスミスに声をかけた。いがみあっているような雰囲気などなかった。クーンやスタインブレナーと長話をはじめるときも、いつも最初は「ハロー」ではじまった。それがレッド・スミスのスポーツに対する接し方でもあった。

「私は、子供たちがやっているゲームを見るようなつもりで、スポーツのことを書いてるんだよ」と彼はよく言った。

だから彼は、ほかのライターには見えなかったものを見ることができた。彼はニッカー・ボッカーを履いていた時代の野球選手や、ズボン下だけのような格好で走ったマイルレースの選手たちのことを書いてきたが、そういったさまざまなメジャースポーツの中でも、彼がこよなく愛したのは競馬だった。

「競馬場には他のどこよりもいろんな話が転がってるんだ」

ケンタッキー・ダービーでもベルモントでも、レッド・スミスは他の人間には探しだせないような話を見つけてはコラムにした。ダービーの一週間前、他のライターたちがルイヴィルにとどまっているというのに、彼は一番人気の馬のいる厩舎に出かけていった。まるで人間のように馬のことを書いた。個人的に好んでやったスポーツは釣りだった。モントリオール・オリンピックの合間には、ケベック北部まで鱒釣りに行った。

「オリンピックをやってるときに釣りに出かけるなんて、他の人ならやっちゃいけないことかもしれないけれどね」と彼は笑って言った。「でも、私はそれでもいいんだよ」。

その二日後、彼は釣りのコラムを書き、読者は相も変わらぬオリンピックの記事を読まなくてすんだと喜んだ。レッド・スミスは、大きなイベントを嫌っていたわけではない。ただ、それがワールド・シリーズにせよ、スーパー・ボウルにせよ、リング上での世紀の対決にせよ、重賞レースにせよ、いるべきところにいたというだけのことだ。しかし、そんな彼でも、一九七九年のワールド・シリーズだけは見ることができなかった。南アフリ

カにヘビー級世界タイトルマッチを見に行かなければならなかったからだ。

「アフリカまで記事を書きに行ったことはなかったものでね」と彼は後に語った。「これで、すべての大陸に足を運んだことになるよ」。

そのとき彼は七十四歳だった。一ブロック先まで歩けない気の毒な七十四歳がいると思えば、自分のリストに大陸をもうひとつ加えるため、レッド・スミスはアフリカにまで足を運ぶ。そして、大陸だけでなく、コラムももうひとつ彼の作品リストにつけ加えられることになる。晩年の彼は、当然のことながら、この分野の第一人者と見なされたが、本人はそう呼ばれることを嫌っていた。一九七五年、アリ＝フレイジャー戦を取材するためにマニラを訪れたときのことだ。てっきり小さな部屋だと思っていたのに、ホテルに着いてみると、彼の部屋は居間つきのスイートだった。

「確かに悪い気はしないけどね」と彼は不機嫌そうにつぶやく。「でも私は、下にもおかない扱いをされるのが嫌いなんだ」。

太平洋を越えてマニラまでの長いフライトの間、一眠りしたひとりのスポーツ・ライターが、さっぱりした顔で機内の通路を歩いている。一睡もできなかったレッド・スミスは、疲れにかすむ目でうらやましそうにそのスポーツ・ライターをにらんだ。

「見てみろよ」ぐっすり眠ったスポーツ・ライターのことを言う。「まるでアメリア・エアハートみたいなもんだな。飛び立ったと思ったら、もう音沙汰なしさ」。

〈ニューヨークタイムズ〉で十年の間同僚だった私たちは、記事のテーマが重なりあわな

いように、お互いチェックしていた。だが、一度だけ、同じテーマについて書いてしまったことがあった。何年か前、私は火曜日のコラム欄のねたにしようと、マディソン・スクエア・ガーデンで行われるウェストミンスター・ドッグ・ショウの月曜日の記者用招待席を頼んでおいた。ところが、その翌日、レッド・スミスが火曜日の席を頼んでしまった。

レッドは編集部からこう言われた。「チケットは大丈夫だけど、でも、デイヴが彼のコラムにドッグ・ショウのことを書くって言ってましたよ」。

引いたのはレッドのほうだった。ドッグ・ショウのコラムが二つもあれば、読者がうんざりすることはわかりきっていたからだ。私はうかつにも、レッドがドッグ・ショウのことを書こうとしていたのを知らなかった。ところが彼のほうも、私がかわりにホッケーのコラムを書こうと決めたことを知らなかった。火曜日の朝、レッドは友人と朝食をとっていた。その友人は、これまで何度も繰り返されてきた質問をした。

「どうやってもうひとりのコラムニストと記事が重ならないようにしてるんですか？」

「何も問題はないんだよ」レッドは答えた。「お互いチェックしてるし、編集部が教えてくれるからね。例えば今日のコラムだけど、デイヴはドッグ・ショウについて書いてるんだよ。見せてあげよう」。

彼はスポーツのページを開いた。わたしがホッケーの記事を書いていることを発見したとき彼のあげた声は、まさにドッグ・ショウ顔負けだった。

彼はいつも、コラムのねたをたくさんストックしておいた。だが、必ずと言っていいほ

ど、何を書くか決めるのは締め切りが目の前に来てからだった。

「神様ってのは優しい人だよ」彼はそう言ったものだ。「いつも何を書けばいいか決めてくれるんだからね」。

実際、最期のときにも、神様は彼に対して優しかった。レッドは、引退など考えてもいなかった。一九八〇年、彼がしばらく病の床にふせっていたとき、ひとりの友人が、もう書くことをやめて引退してはどうか、とすすめたことがあった。

「嫌だね、絶対に」そうレッド・スミスは答えた。「書かないんだったら、死んだほうがましだよ」。

その言葉どおり、彼は死ぬまで書きつづけた。最後のコラムが掲載されたのは、一九八二年一月十五日に心臓発作で彼がこの世を去った四日前のことだった。そのコラムは、スポーツ・ライターとしてのこれまでを振り返ったものだった。今考えてみれば、それが彼なりの人生の総まとめだったのだろう。

「グラニー・ライスみたいな死に方をしたいね」と彼は言っていた。グラニー・ライスは、先輩スポーツ・コラムニストであり、彼の友人でもあった。「タイプライターに覆いかぶさって死にたいんだ」。

レッド・スミスは、彼のとりあげた選手たちほどには、有名ではなかった。だが、有名な選手たちは、彼のことを最高のスポーツ・コラムニストとして尊敬していた。モハメッド・アリは、群がるスポーツラ・イターの中に小柄で白髪の男を見つけると、こう言ったものだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「レッド・スミス、あんたは一九六〇年のローマ・オリンピックのときのおれのことも書いてたってのに、今でもまだ書きつづけてるんだな。たぶんあんたがもっとも偉大な男だよ」

レジー・ジャクソンは、彼の名前を使った棒型のキャンディが発売された日、レッド・スミスの姿をヤンキースのロッカールームで見つけてこう言った。「ヘイ、レッド」レジーはにやにや笑っていた。「あんたの名前を使ったペンはまだなのかい？」

レッド・スミスは笑って首を振った。しかしその次にヤンキー・スタジアムを訪れたとき、彼はロッカー・ルームのレジーのほうへ近づいていき、ブリーフケースを開けると、昔から売られている太いペンを取りだした。

「ほら、この前、私の名前をつけたペンはまだか、って聞いてただろう？　こいつがそうさ。このペンは、ビッグ・レッドって言うんだよ」。

同僚たちは、まるで彼が守護聖人であるかのように接した。レッド・スミスが、当時〈ワシントン・スター〉のスポーツ・コラムニストだったモー・シーゲルと一緒にテキサス・スタジアムの記者席をあとにしようとしたときのことだ。何人かのライターがふざけて、ふたりの行く手を妨害しようとした。

「道を開けろ」モー・シーゲルは、レッド・スミスの肩に手をまわしてその連中に言った。「この人をなんだと思ってるんだ。ピューリッツァー賞受賞者殿なんだぞ」と。

もしあなたがレッド・スミスのコラムを楽しんだなら、彼のために祈ってやってほしい。彼は祈りなど必要としないかもしれないけれど。

それから、彼のために、ウォッカ・アンド・トニックを一杯。もちろん、ライム抜きで。

まえがき

ピート・ローズは、何もかも野球用語に言い換えてしまう。生まれた年を聞いたなら、彼は「ディマッジオの連続安打の年だよ」と答えるにちがいない。一九四一年、ジョー・ディマッジオが五六試合連続安打を達成した年に生まれたと言いたいのだ。

「書く仕事を始めてどのくらいになります？」とピートに聞かれたことがある。

「そうだな」と私は言った。「新聞に初めて定期的に書くようになったのが、一九二七年だったかな」。

「じゃあ、ベイブ・ルースが六〇本ホームランを打った年だ」そう彼は言った。

算数で賞状をもらうことはなかったけれど、新聞人としての年月は半世紀を上まわる。それは、あちこち旅をして興味深い人々と出会うには、十分な年月と言えるだろう。もしも私が、そういう連中とめぐり会える幸運に人より恵まれていたとしたら、それは私の持ち前の魅力のせいではもちろんなく、ただ職業ゆえのことだ。

仕事のおかげで私は世界中を駆け回り、何千という人々と会うことができた。彼らは、身体つきも外見も、肌の色も信条も、辛いばかりと言ってもいい仕事の条件もそれぞれに違ってはいても、そのほとんどにひとつだけ共通していることがあった――男も女も、ともに行動の人であるということだ。彼らが成し遂げたことはいやおうなく人々の注目を集

め、彼らがその人生の終りを迎えたとき、その死は多くの人々の心の奥深くに触れたのである。

本書は、そんな人たちの何人かを紹介しようとするものだ。たいがいは私の友人であり、そのうちのいくたりかはかけがえのない友でもあった。

彼らのことを書くにあたって、私の文章が感傷に流されていなければ、幸いである。だが、時に感情が、タイプライターを叩く指を支配していたとしても、それもまたやむをえないことだと思う。

やがて読者も、〝スウィート〟や〝グレイト〟などと形容される連中に出会うことだろう。それはもってまわった形容ではあっても、真実を伝えているのである。これまで一度だって私は、「死者を鞭打つな（デ・モーテュイ・ニル・ニ・ボスム）」派に与（くみ）したことはない。サミュエル・ジョンソン博士は、生者の性格や行動と、墓石に刻まれたセンチメンタルな言葉との間にある矛盾に言及して、「けして人は、墓碑銘そのものを信ずるわけではない」と述べている。だからこそ私は、ありのままの本人たちを描こうと努力したのである。私が誰かのことを偉大な男だと書いたなら、それは私が心底そう思っていたということなのだ。

読み返してみると、あちこちに笑いを誘うようなエピソードを紹介していることに気づく。それは、私が何よりも大切にしてきた彼らとの想い出の楽しかった日々は、笑いによってより豊かなものになると思うからだ。そういった日々を、私は他の職業の人たちよりも味わうチャンスに恵まれていたのだと思う。そうだとしたら、感謝すべきことだ。きっと、私が旅をした世界は、他のどこよりも楽しいものであったにちがいない。

私は、プリモ・カルネラにインタビューしたときのことを思い出す。あのそっ歯の大男が、ボクシングの世界ヘヴィ級チャンピオンシップをマックス・ベアに譲り渡して、イタリアに引っこんでからずっと後のことだった。故郷に戻った彼は、その頃プロレスラーとして活躍していたのだった。私は彼に、あなたの全盛期でもっとも楽しかった想い出を話してもらえないかと頼んだ。

彼は思いだそうと努めたが、無念げにかぶりを振った。

「金はいっぱいあったし」彼はそんなふうに言った。「そして楽しいこともいっぱいあったよ」と。

一九八一年九月　マーサズ・ヴァインヤードにて

レッド・スミス

＊まえがきのためのフットノート

というように、レッドはネタを集め、まるで箱の中に投げ入れるように次々とコラムを書いていったのでした。その中で、今はなきお友だちに関するコラムだけをまとめようとしていたのですが、そのために無理に書こうとはしませんでした。そしてたとえ話が重複したとしてもそのままにしておき、決して手を加えようとはしなかったのです。

一九七三年の秋、マーサズ・ヴィンヤードでのこと、私たちは暖炉の前に座り、休日の夕方を暖かく過ごしながら、彼は「冬のいちご」というコラムの仕上げに言葉を選び、磨いていまし

た。結局、と彼は言いました。締切りに追われたコラムニストというものは、これまでに何度も記事に使われた手垢にまみれた言葉や表現というのを、気づかず、あるいは心にとめもせずについ使ってしまうものらしい、と。レッドはとくに、ハード・カバーの本では言葉を大切にするよう心がけていました。

去年の夏、そのヴァインヤードで、彼は何年もの間溜めてきた中から選びだした、これらのコラムに目を通していたのです。休暇でもなく、とても疲れてもいました。もしこの本の最終稿が、そのときの原稿ほどに彼が注意を払えなかったとしても、それは大した問題ではないと思います。ここに結晶した、人を見るときのレッド独特の視点や、数多くのお友だちに対する彼の心からの愛情、そしてそれらを私たちの目の前に生き生きと描きだしてみせる彼の能力は、少しも変わらないからなのです。

フィリス・W・スミス（ミセズ・ウォルター）

今はなき友へ　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com